

平成30年度「山形学」講座全5回が終了しました！

第1回目は「どっこい方言は生きている 方言とわたし」と題して、跡見学園女子大学准教授の加藤大鶴氏をお迎えし、「山形学」企画委員の阿部康子氏をコーディネーターに講座を開催しました。

加藤大鶴氏は、山形の方言について、青森・岩手北部・秋田・新潟北部・山形庄内が属する北奥羽方言と、岩手南部・宮城・山形内陸・福島が属する南奥羽方言の境界に位置するとし、県内4地域で、同じ単語をどのように表現しているのか等をパワーポイントの資料を映しながらお話しくださいました。参加者同士でそれぞれの方言に関する思い出を語り合うグループワークも行われました。また、戦後、特に1960年代あたりから現在まで変遷してきた方言の価値について紹介され、教育の場で撲滅運動がなされてきたことや現代の方言ブームにいたるまでを実例を示しながら解説いただきました。また、全国の人が共通で使用していないという視点から、普段我々が気づきにくい方言や新しい方言があることを指摘され（いちまるにまる、いちかっこにかっこ、カットバン、やまえき、かじょせん等）、衰退して使われなくなっていく方言があること、同時に新しく生まれてくるものがあることを学びました。

山形の地域ごとの伝統的な方言の衰退や消失と、気づかずに長年使っている言葉が新たに生まれた方言であることや、現代における方言の価値を学ぶ大変有意義な講座となりました。

第1回「どっこい方言は生きている 方言とわたし」

コーディネーター：阿部康子氏（元東北文教大学短期大学部教授）

講師：加藤大鶴氏（跡見学園女子大学准教授）

場 所：遊学館3階 第1研修室

日 時：平成30年7月29日（日）13：30～16：00

参加者：70名



第2回目は「どっこい方言は生きている 方言と最上」と題して、山形大学教授の中澤信幸氏、最上地域史研究会幹事の三浦和枝氏、新庄民具研究会の伊藤佐吉氏、新庄民話の会の渡部豊子氏を講師にお迎えし、「山形学」企画委員の松尾剛次氏をコーディネーターとして、新庄ふるさと歴史センターと新庄市民プラザを巡る現地学習を開催しました。

中澤信幸氏からは、山形県内4地域の方言をその特色から解説いただきました。方言を音声面、文法面から特徴を挙げていくと、敬語の使い方などにも違いが生じてくることなどを学びました。また、置賜地域として考えられている小国地域は、以前は米沢とは地理的に隔絶されていたため、新潟との結びつきを強めた結果独特の方言を育んできたことなどもお話いただきました。

見学先である新庄ふるさと歴史センターでは、伊藤佐吉氏より、新庄弁で民具の解説をしていただきました。雪国の生活に欠かせなかったわら細工の民具や、農村の生活を支えた農具など、現代では珍しくなりつつある道具の数々をご説明いただきました。

新庄市民プラザでは、三浦和枝氏より、新庄最上の方言の特徴や実例を共通語を交えながらお話いただきました。特に、城下町であった歴史的背景から「家中言葉」が広く使われていることを紹介いただきました。また、新庄民話の会で長年語り部としてご活躍されている渡部豊子氏からは、新庄弁による民話語りを実演していただきました。「若返りの水」「稲株昔」などの民話を語っていただきました。

なぜ新庄地区で数多くの民話が語り継がれてきたのか、それはなぜ「民話」であったのか、などもお話いただきました。

新庄・最上地域の言葉を、学問としての分類のみならず歴史や文化的な側面についても学び、大変有意義な現地学習となりました。

第2回「どっこい方言は生きている 方言と最上」

コーディネーター：松尾剛次氏（山形大学人文社会科学部教授）

講師：中澤信幸氏（山形大学人文社会科学部教授）、三浦和枝氏（最上市域史研究会幹事）、伊藤佐吉氏（新庄民具研究会、新庄民話の会）、渡部豊子氏（新庄民話の会）

場所：新庄ふるさと歴史センター、新庄市民プラザ

日時：平成30年8月5日（日）9：30～16：30

参加者：56名



第3回目の「山形学」講座は「どっこい方言は生きている 方言と庄内」と題して、講師に郷土史研究家の黒羽根洋司氏、歌手の白崎映美氏、元三川トピア創造委員会委員長の志田徳久氏をお迎えし、「山形学」企画委員の小林好雄氏をコーディネーターに、いろり火の里施設内宿泊施設田田の宿にて現地学習を行いました。

志田徳久氏からは、三川町で行われていた「全国方言大会」について、その全17回の歴史を振り返りながら、なぜこの催しが三川町で行われるに至ったのかという経緯や人の動き、継続していく中での困難などについてお話しいただきました。

黒羽根洋司氏からは、庄内地方の方言についての解説を、数多くの具体例を資料で示しながらしていただき、言葉があらわす庄内の人間性、風土、歴史を明らかにされました。また、ご自身が医師であった経験から、方言でのコミュニケーションが医療の現場で果たす役割についてもお話しいただきました。

白崎映美氏からは、ご自身の出身地である酒田の方言で、どのような経緯で歌手になったか、芸能活動の中で方言を改めて見つめるきっかけがあった事、東日本大震災をきっかけに始めた新たな表現活動についてお話しいただきました。ユーモアを交えたお話や、被災した東北へ向けての熱い思いを込めたお話もあり、終止故郷へ、ひいては我々へのエールとを感じるお話をしていただき、受講生と一緒に歌った最上川舟歌では会場が一体感に包まれました。

講師とコーディネーターが揃ったフォーラムでは、活発な質疑応答がおこなわれ、庄内の方言についての理解を、文化や歴史の面からも深めた一日となりました。

第3回「どっこい方言は生きている 方言と庄内」

コーディネーター：小林好雄氏（(株)出羽庄内地域デザイン代表取締役）

講師：黒羽根洋司氏（郷土史研究家）、白崎映美氏（歌手）、
志田徳久氏（元三川トピア創造委員会委員長）

場所：いろり火の里施設内宿泊施設田田の宿

日時：平成30年9月2日（日）9：00～16：40

参加者：67名



第4回目の「山形学」講座は「どっこい方言は生きている 演劇にみる方言」と題して、講師に下館和巳氏（東北学院大学教授）と今田由美子氏（俳優）をお迎えし、「山形学」企画委員の菊地和博氏をコーディネーターに、館内学習を行いました。

下館和巳氏は、東北の歴史や言葉を生かして活動する劇団「シェイクスピア・カンパニー」を長年主宰し、シェイクスピア劇の本場イギリスでの芝居上演の経験をお話し下さり、その様子を追ったドキュメンタリー映像も上映されました。ご自身が留学先のイギリスで見た演劇作品の多くに方言が使われていたことに衝撃を受けたこととお話いただき、難解なシェイクスピア劇をあえて方言で演じることによる効果を、演者側と観客側の両方からの分析を解説していただきました。世界とつながるときに求められているものはオリジナリティーであるとお話しされ、方言に誇りをもっていきたい、と語っていただきました。

今田由美子氏は、まず、山形を拠点に活動する舞台俳優である自身の経歴について触れ、山形で演劇活動を続けていこうと考えたきっかけや、多岐にわたる活動の実際をお話しいただきました。山形で生まれた女性たちの人生を描くひとり芝居の舞台シリーズの映像を流しながら、山形の女性の人生を、山形の言葉で語り演じていくことの意味を、お話しいただきました。また、出演と方言指導の両方を果たされた映画「おしん」の現場での様子など、普段知ることのできない仕事についてもお話しいただきました。

共通語で演じられることの多い演劇や映画、ドラマの中にあえて方言を用いることの意味を、改めて考える大変有意義な講座となりました。

第4回「どっこい方言は生きている 演劇にみる方言」

コーディネーター：菊地和博氏（東北文教大学短期大学部特任教授）

講師：下館和巳氏（東北学院大学教授）、今田由美子氏（俳優）

場所：遊学館3F 第1研修室

日時：平成30年9月29日（土）13:30～16:00

参加者：43名



第5回目の「山形学」講座は「どっこい方言は生きている 方言の未来と進化」と題して、日本大学教授の田中ゆかり氏と、タレントのミッチーチェン氏を講師にお迎えし、「山形学」企画委員の加藤大鶴氏をコーディネーターに、講話とパネルディスカッションが行われました。

ミッチーチェン氏は、県内で放映される多数のCMに出演し、その多くが方言で喋る役どころであることと、全国メディアでは必ずしも方言タレントとして活動していないことの両方にふれ、山形を全国に向けて発信していくために、方言は非常に強力なツールとなることをお話されました。自身の活動の一端として、方言でラップを歌うMC GATAの作品を映像で流した後、会場で実際にパフォーマンスをしていただき、ラップ音楽になじみのない世代も歌詞が「方言」であることから楽曲を楽しみ、会場が手拍子と拍手に包まれました。

田中ゆかり氏は、現代における方言の価値の変遷を、さまざまなわかり易い実例を示しながらお話してくださいました。教育現場での標準語政策の方針やテレビの普及により、日本全体が共通語化していった時代には、方言はスティグマ（負の表象、レッテルのようなもの）としてとらえられていたが、方言を場面で使い分けることのできる世代が生まれ、着脱自在で価値のあるアクセサリーとしての役割を方言が持ってきたことを解説していただきました。変遷の近年の理由の大きなものとしてインターネットの普及があるとし、方言を目で文字として「見る」、耳で音として「聞く」の両方が一度に果たせることにより、方言から想起されるキャラクターになりきる、装うといった「方言コスプレ」にまで広がっていることもお話してくださいました。最後に、若い世代に積極的に価値あるものとして受け入れられている方言は、今後もなくならない、と締めくくり、方言の行方を案じていた受講生の方々に力強い思いを伝える講座となりました。

今年度全5回の講座での学びをもとに、山形への理解をさらに深めていただければと思います。

第5回「どっこい方言は生きている 方言の未来と進化」

コーディネーター：加藤大鶴氏（跡見学園女子大学准教授）

講師：田中ゆかり氏（日本大学教授）、ミッチーチェン氏（タレント）

場所：遊学館3F第1研修室

日時：平成30年10月7日（日）13:30～16:20

参加者：46名



☆平成30年度「山形学」フォーラム及び講座は、全講座終了後に内容をまとめ、講座録"遊学館ボックス"として発刊いたします。これまでの講座も冊子にしており、販売しておりますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。